

平成30年09月19日

ワークショップ：海底ケーブルの科学利用と関連技術に関する将来展望

【ワークショップ：海底ケーブルの科学利用
と関連技術に関する将来展望】

東京大学生産技術研究所
海中観測実装工学研究センター
川口勝義

- 通信用海底ケーブル技術を基礎とした海中海底のリアルタイム観測技術は、この十年で大きく成長し、海と地球を理解するための重要なインフラストラクチャに位置づけられるようになった。
- 日本を含む複数の国で始まった、開発計画は、ほぼ 10 年の時を経て基本的なインフラの整備が整い実証観測のフェーズが始まっている。
- 開発当初の青写真を振り返ると、実現を目指した多様な項目の中には、実施の目途が立ったもの、依然立たないものなどがあり、その粒度はさまざまである。
- リアルタイムかつ長期連続のデータ取得が可能な海底ケーブル式観測システムの利活用の最大化を目指し、開発計画からさらに踏み込んだ運用計画＝活用計画を議論すべき時期に来ている。

・国内に目を向けると、平成30年5月に第3期海洋基本計画が取りまとめられ、その中には、自然災害への対応などを含む海洋の総合的安全保障を推進することが掲げられ、さらに海洋の状況把握(MDA: Maritime domain awareness)能力の強化に向けた取り組みを進めることが明記されている。

本WSにおいては次の10年を視野に、推進すべき研究課題や技術課題、観測技術の商用展開の方向等について、研究者、メーカーを含む海底ケーブルコミュニティの中で意識の共有を図ることを目的とする。